

# 森林にも迫る高齡化

## CO2吸収、ピークの8割

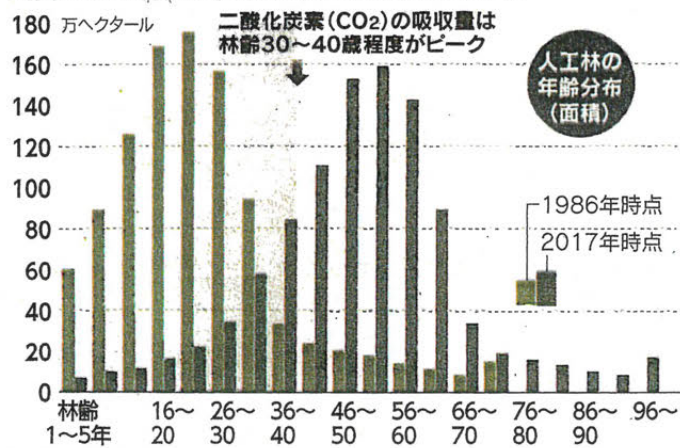
全国の人工林の過半が50歳を超え、高齢化が目立ってきた。国内の林業は安価な輸入木材に押されて産業競争力が低下し、伐採や再造林が進まない負の連鎖に陥っている。手入れされていない放置林は台風などの災害に弱く、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)の吸収源としても認められない。森林の荒廃に歯止めをかけなければ、地域の安全確保や脱炭素の壁となる恐れがある。

## 脱炭素や防災の壁

2019年の台風15号「したのは、人の手が入らなくて大停電が発生した干葉 ないままの放置林だった。間伐を怠っている」と。人工林の多くは第2次世界大戦後、国土復興のために植えられた。近年は整備が行き届かず、一部は荒廃するに任せたままになっている。千葉県山武市の担当者は「毎年伐採しても追いつかないくらい対象箇所が多い」と漏らす。

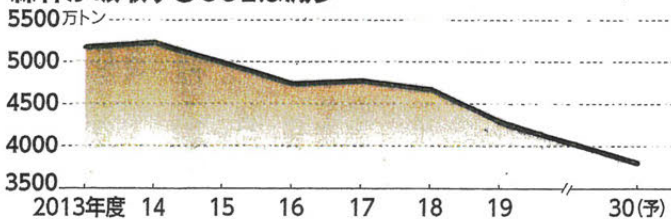
## チャートは語る

### 国内の人工林は半分以上が50歳を超える

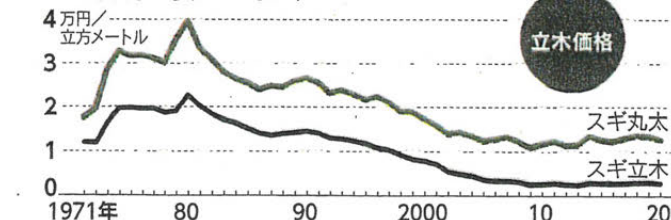


(出所)林野庁調べ

### 森林が吸収するCO2は減少



### スギの価格は低迷が続く



(出所)農林水産省、日本不動産研究所(山林業地及び山元立木価格調)

日当たりにくくなる。木々は細くなり、草の根つかない地盤はもろくなる。人工林の多くは第2次世界大戦後、国土復興のために植えられた。近年は整備が行き届かず、一部は荒廃するに任せたままになっている。千葉県山武市の担当者は「毎年伐採しても追いつかないくらい対象箇所が多い」と漏らす。

「造林未済地」は17年度に約1万1400畝と3年前より3割増えた。50歳を超える森林は500万畝を超え、人工林全体の半分以上を占めるに至っている。

「造林未済地」は17年度に約1万1400畝と3年前より3割増えた。50歳を超える森林は500万畝を超え、人工林全体の半分以上を占めるに至っている。

森林の老いがもたらす問題は防災に限らない。林野庁は日本の森林が吸収するCO<sub>2</sub>は2014年度の5200万トンを直近のピークで、19年度は約2割少ない4300万トまで減ったと推計する。CO<sub>2</sub>を取り込む量は樹齢40年を過ぎて成長が落ちてくると頭打ちになると考えられている。

政府は4月、30年度に温暖化ガスを13年度比で46%削減する目標を表明した。森林によるCO<sub>2</sub>吸収量は目標の5%にあたる年約3800万トと想定する。今のペースで森林が老いていくと吸収源の役割を果たせなくなり、脱炭素の足かせになりかねない。

京・港)によると、20年にスギの丸太の売り上げから経費を引いた金額(立木価格)は1立方メートル2900円、2万円を超えていたピークの1980年(ころ)の1割程度だ。世界的に川下の木材価格が高騰したウッドショックの下でも、川上の立木価格は低迷したまま。ある大手林業家は「とても採算が合わない。林業は衰退の一方だ」と吐露する。

20年の建築木材の総需量は占める国産の割合は半分弱にとどまる。木材の輸出国として知られるカナダや米国は平地が多い。山がちな日本は林道整備や搬出に手間がかかる不利を背負った。コスト競争力を高めるために林地を集約しようにも「(山地で)境界線が不明なことが妨げになっている」(東京工業大学の米田雅子特任教授)。相

近畿大学の松本光朗教授は「木材利用を促進し、成果を川上の林業に還元する政策が求められる」と指摘する。機械化による生産性の向上、複雑な所有権の整理など取り組むべき課題は多い。防災など幅広い観点から官民の知恵や資金を集める必要がある。

(杉原淳一、越智小夏)